

中村雄二郎氏の『術語集』(岩波新書)

が版を重ね、既に何十万かの読者を獲得しているといふ。氏が、西欧近代主義が置き去りにしてきたペトスに光を当て、ペトスの知の復権を提倡した哲学学者であることはよく知られている。ペトスとは、一般にロゴス(理性)と対比され、ロゴスが意識の客体的な面であるとすれば、主体的な意識はペトスとして把えられる。人間をその全き現象性において把えるべく、ペトス的意識を強調した先人は、三木清であったといふ。

氏は、これをふまえつさらにギリシヤ語の原義に即して意味を敷衍し、その身体性と受苦性に光を当てる。すなわち、人間が身体を持った存在である以上は、外界からの働きかけに身をさらし、そのゆえの激情に囚われ、痛みや苦しみを被ることも避け難い。しかし現代人は、人間の強さだけを前提とした分析科学的な知を基盤として、ひたすら、それ

らを克服し支配しようとしてきた。この

限界がいま漸くあらわになり始めていることを思うなら、改めて、受動・受苦・

痛み・病いなど、人間の弱さの自覚に立つ

たペトスの知が顧られねばならないだろ

う。人間が、受動的受苦的存在であるとき、他者や自然是対象化され操作されるのではなく、それらと相互主体にコミッ

トしつついきいきと関係し合うことが可

能となるのだ。従つて、ペトスの知とは、広い意味で、臨床的な知とい得る。

以上の説明は、いうまでもなく、氏の

『術語集』から抽出してまとめたもので

あるが、ここで、私どもは、改めて気付

かされるだろう。現代の尖端的な哲学や

思想の潮流が目指すものと、保育の世界

が追求してきたものとが、見事なまでに

重なり合うということに……。そういう

ば、食櫻惣三、津守真と辿られる保育界の指導者たちは、何と「ペトス的」であ

ることだらう。

(H)

幼児の教育 第八十四巻 第七号

七月号 ◎

定価三五〇円

昭和六十年六月二十五日 印刷
昭和六十年七月一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼
発行人 本田和子

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーべル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーべル館にお願いいたします

*万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。